

派遣報告書

2011年2月15日

人文社会系研究科

■概要

2009年2月から2011年1月の2年間にわたり、国立台湾大学藝術史研究所の博士課程に所属、毎学期2、3コマの中国絵画史に関するゼミに参加し、不定期に開かれる研究会にも出席した。これらの機会を通じて、東京大学とは異なる台湾大学の研究風土の一端を知ることができた。また、積極的に口頭発表をし、議論に参加、レポートを提出することで、東京大学で培ってきた自分の研究手法を同研究所の大学院生に伝えることができ、相互理解を深めることができた。世界の中国絵画史研究を牽引する同研究所との連携は、日本の中国絵画史研究に必要不可欠であるが、今回の派遣を通じて、台湾大学側にも、東京大学の研究への高い関心があることがわかった。2年の台湾大学での研究生活で培った、中国語で議論する力、研究状況の相違への理解、人的ネットワークの構築により、今後の学術交流に大きな役割が果たせるようになった。また、より広い視野で自分の研究を評価できるようになり、研究の発信力を高めることができた。

■台湾大学藝術史研究所

台湾は、台北にある国立故宫博物院に質的には世界最大ともいえる中国絵画コレクションを有し、自国の文化として中国美術を扱う、世界の中国絵画史研究における中心地の一つである。研究者の数も多く、国際的なシンポジウムや講演会も活発に行われている。国立台湾大学藝術史研究所は、1989年の成立以来、台湾における中国絵画研究を牽引してきた。現在、同研究所の書画部門の専任・兼任教授である、石守謙教授、陳葆真教授はいずれも世界的に有名な中国絵画史研究者であり、その業績は国内外で高く評価されている。

美術史研究の動向はその国の持つコレクションの性質によって左右されるところが大きい。日本と台湾は共に豊富な中国絵画コレクションを持つが、時代や作者の点でそれぞれ異なった性格を有する。従って両国の個々の作品に対する評価には違いがあり、そこから形成される歴史観や研究手法も異なっている。また、現在台湾で活躍する研究者の多くはアメリカやヨーロッパ各国、日本など国外の大学で博士号を取得しており、彼らの密接な交流、共同研究により、国際的な広い視野に立った、多様な関心に基づく研究が進められている。

■藝術史研究所における東京大学への興味

藝術史研究所に所属する大学院生には高いレベルでの日本語能力が求められ、授業中に紹介される日本の研究も多く、中国と日本の美術の比較研究に対する関心も高い。特に同研究所の石守謙教授は中国・日本・韓国を中心とした、東アジア絵画史の視点の必要性を

提唱しており、学生の間にも中国一国ではなく、日本や韓国との関係の中で中国絵画史を語るべきだという考えが浸透している。東京大学では、1949年に東方文化学院（1929年設立）の美術考古部が本学東洋文化研究所に吸収されてから、中国絵画の資料収集・研究が継続的に行われており、日本における中国絵画研究の一中心を担ってきている。また中国絵画史研究においても、日本美術との関係を念頭に置く伝統が根付いている。台湾大学においてもこのことはよく理解されており、東京大学の研究への関心は高いと言えよう。

■今後の学術交流における役割、研究への展望

ゼミや研究会での活動を通じ、美術史研究にとって重要な作品評価の違いや、日本における最新の研究の紹介、また日本美術との関わりについて、藝術史研究所の学生と意見を交換してきたが、2年間の藝術史研究所における活動を通じて、東京大学の研究風土の一端を同研究所に伝えることができたと思う。今後も、派遣中に培った、中国語を使って専門的問題について議論する能力、研究者間の人的ネットワーク、特に同世代の若手研究者とのそれを、日本と台湾の学術交流に活かしていきたい。

また、異なった研究風土での活動を通じて、自分の研究が国際的にどのように位置づけられるのか、日本に基盤を置く若手の中国絵画史研究者に何が求められているのか、自分の置かれた環境をどのように活かすべきかなどについて考察を深めることができた。これは、今後の研究活動全般に役立つ、有意義な成果であったと考える。

台湾・国立台湾大学派遣報告書

人文社会系研究科・アジア文化研究専攻

中国語中国文学専門分野博士課程3年

09～11年度派遣留学生

1.授業

中国語を専攻する私にとって、台湾は中国大陸と並び、中国語研究の本場であり、魅力的な留学先でした。国立台湾大学の中国文学科で開講される授業は、語学・文学から歴史・哲学まで多岐に亘り、また時代も先史から現代まですべての期間をカバーしており、質・量ともに充実しています。特に、「台湾言語概論」など、台湾当地ならではの授業では、台湾少数民族をも範囲に収めた内容で、日本では到底学習し得ないものでした。現代はインターネットの普及もあって、外国語の学習・研究環境は以前に比べ非常によくなり、国内にいてもそれなりの成果を挙げることができるようになりましたが、それでもなお、国外に留学してみないと研究が難しい分野があるものだと実感しました。

また、台湾大学では、当たり前のことですが授業はすべて中国語で行われるため、中国語の研究方面だけでなく、運用能力の育成においても優れた環境でした。中国語の教科書を読む・講義内容を聴き取る・中国語で発表する・レポートを書く、といった作業を通じて、中国語の“読む・聴く・話す・書く”すべての能力を満遍なく伸ばすことができました。これも、貴重な体験だったと感じています。教授はもちろん、学生も優秀な方が多く、講義や学生の研究発表を聴いて、多くの知見を得られたことも、今後の研究生活において、大きな財産になるだろうと思っています。

2.設備

台湾大学は台湾第一の国立大学であり、設備面でも非常に充実した環境でした。24時間開放の自習室を備える総合図書館は、台湾随一の蔵書数を誇り、中国語で書かれた書籍は勿論、日本語で書かれた本・主要雑誌なども豊富に取り揃えています。また、休日はイベントやコンサートが開かれるほどの大規模な体育館は、温水プールやジムを完備し、留学生は格安で利用できるのも、運動不足になることもありません。広大なキャンパスは、ゴイサギや台湾リスも棲息するほど緑豊かで、読書で疲れた身体を癒してくれます。留学生が割り当てられる学生宿舎もキャンパス内にあり、学問をするには理想的な環境と言えるでしょう。

3.交流

日本ではなかなか知り合う機会のない台湾人も、今回の留学で多くの人と友達になることができました。授業ではなかなか学ぶ機会のない中国語の生活用語や、台湾人の文化・慣習などは、彼らとの交流を通じて学んだことが少なくありません。また、台湾大学は世界各地の大学と留学協定を結んでいるので、日本の他にも、世界各地から留学生がやって来

ます。彼らとは、主に学生宿舎や留学生向け中国語の授業で知り合うことが多かったのですが、同じ留学生として親近感も湧くので仲良くなりやすく、また、日本人・台湾人とは異なる習慣・考え方を持っているので、非常に刺激的で、自分の視野が広がったように思います。台湾に留学することで、台湾だけでなく、世界各地の人々と友達になれたことは、海外留学の醍醐味であり、大きな収穫だと実感しています。